

書 評

ギフテッド 天才の育て方

杉山登志郎・岡南・小倉正義著、学研教育出版、2009年12月刊、189ページ

評者：合 田 美 穂

1. はじめに

近年、発達障害者支援法の施行（2005年）を契機として、メディアでも、発達障害が、医療、教育、社会問題、就労問題などの諸問題を通して、頻繁に取り上げられるようになってきており、発達障害に対する社会的な認知度も高まってきている。文部科学省が、2002年に、通常学級において、LD（学習障害）、AD/HD（注意欠陥／多動性障害）、アスペルガー症候群といった障害が疑われる、特別支援が必要な児童生徒の全国実態調査を実施した結果、該当する児童生徒の割合は6.3%となったと報告されている。この数字からも、発達障害は、私たちにとって、決して無縁ではない身近な存在となっている。

2006年に成立した改正学校教育法では、通常学級における特別支援教育の対象に、LDやAD/HDの軽度発達障害の子どもたちも含まれることになった。このように、発達障害の子どもたちは軽度も含めて、福祉や教育で特別な支援を得られるようになってきており、特別支援教育も変容を迫られるようになっていく。

本書では、日本の特別支援教育の現状をふまえて、欧米における特別支援教育の中から、日本が学べるものを紹介している。欧米諸国における特別支援教育の場合は、発達障害の有無に関わらず、通常の教育課程では十分な教育効果が望めないと思われる子どもたちが、特別支援教育の対象となっている。そこには、学習能力が極めて高い子どもたちも含まれている。特に、全てあるいは一部の領域における学習能力が極めて高い子どもたちに対しては、「ギフテッド教育」が実施されている。

本書は、日本における「ギフテッドへの特別支援教育の必要性」を提起した書籍で、雑誌『実践障害児教育』にて1年間連載された文章をベースにして加筆修正されたものである。

第1著者の杉山登志郎氏は、久留米大学医学部卒業後、静岡県立病院養心荘、愛知県心身障害者コロニー中央病院精神科などにて勤務。その後は、アメリカUCLA神経精神医学研究所への留学、名古屋大学医学部精神科助手、静岡大学教育学部教授、あいち小児保健医療総合センター心療部長を経て、現在、浜松医科大学児童青年期精神医学講座特任教授を務めている。専門は、児童青年精神医学。医学博士。発達障害、子ども虐待などの臨床の現場から障害児教育へのさまざまな提言や発信を行っている。

第2著者の岡南氏は、桑沢デザイン研究所・住宅インテリア研究科を卒業後、第16回リフォームコンクール総合部門で優秀賞を受賞したり、愛知万博では愛知県館・長久手と瀬戸の両VIPルームで設計表現したりするなどの業績を持つ。日本建築学会、日本インテリア学会、日本小児精神神経学会に所属。住宅・会社社屋・美術館などの公共建築物の内装設計および色彩計画を行っているほか、自身の映像思考から視覚認知の研究などを行っている。

第3著者の小倉正義氏は、名古屋大学教育学部卒業、同大学院教育発達科学研究科博士前期課程修了、同大学院同研究科博士後期課程中退後、現在は名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター「軽度発達障害分野における治療教育的支援事業」にて特任研究員を務めている。臨床心理士。専門は発達臨床心理学で、学校と家庭との連携、被援助志向性、

発達障害のある子どもへの支援、子どもの強迫様行動などを研究している。

本書では、上記3名の著者によって、ギフテッド児、発達障害の子どもが有する発達凸凹に着目した特別支援教育のあり方などについての提言がまとめられ、著者ら自身の臨床経験のみならず、参考文献、アメリカでのギフテッド教育なども文中にて適切に引用されている。ギフテッド教育、特に発達障害児に照準を当てたギフテッド教育についての書籍は、これまで日本ではほとんど出版されていなかったために、画期的な書籍であるとも言える。

2. 本書について

本書は、大きく10の章に分かれている。第1章は発達障害とギフテッドの関係、第2章はアスペルガー症候群の分類であり、杉山氏によって執筆されている。第3章から第6章までは視覚優位型および聴覚優位型の特性とその支援について、岡氏によって執筆されている。そして、第7章はアメリカにおけるギフテッド教育、第8章は「2E」の子どもへの教育について、小倉氏によって執筆されている。第9章は、創造性について、第10章は今後の特別支援教育に対する提言であり、杉山氏による執筆である。

第1章のタイトルは「発達障害から発達凸凹へ」である。動物学者であり、米国イリノイ大学准教授でもある高機能自閉症の「テンプル・グランディ氏」の事例、および知能は高いが問題行動が目立つ小学校4年生の「A君」の事例が紹介されている。「A君」が不登校をきっかけに、日本のアメリカンスクールへの転校を経て、アメリカの大学に進学し、そこで才能を発揮して高い評価を得られたという話を通して、著者は「天才児への特別支援教育」の重要性に言及している。

現在、アメリカでは約200万人の子どもたちが、天才児のための特別支援教育プログラムを受けており、そこでは、単に知的に高いグループだけではなく、才能および発達障害を持つグループ（「2E=twice exceptional

children」と呼ばれているグループ）も対象となっている。著者は、あらためて「与えられた天賦の凸凹」という意味を込めて、彼らに対して「ギフテッド」という言葉を使用している。こういった著しい才能の凸凹を持つギフテッドの子どもたちは、集団教育の場では、適応することが難しく、子どもが本来持つ能力を十分に伸ばすためには、子どもたちの個別のニーズにある程度応じてゆかねばならないとしている。

著者は、発達障害の素因となるいくつかの遺伝子もつ情報が発現する過程（エピジェネティックの過程）において、環境要因が大きく関与していることを述べている。そして、近年の発達障害の罹病率が大きく増加する中で、普遍的に発達障害の素因をもつものが一般人の間に存在するのが軽度発達障害であり、それによって、療育のパラダイムが変わらざるを得ないとしている。

そして、従来の日本の発達障害療育は、バトンタッチ型と呼ばれるモデルであり、基本的には1つの専門機関（療育センター）が、一括して引き受けるというシステムとなっている中で、非分離、参加、民営を基本とする協働型の療育モデルの必要性を強調している。

現在、日本では、実際には、大きな地域差があるとはいえ、この協働型の療育モデルへ移行している段階であり、療育全体のパラダイムの変化の基盤の上で、特殊教育から特別支援教育への転換が行われているという。そのような状況のもとで、あるべき特別支援教育とは、発達凸凹の子どもに特別な支援を含む対応を行い、発達障害を防ぐという意味づけが可能になるとしている。

この章の最後に、著者は、特別支援教育の対象となる天才児を、「高い全体的知能をもつ子ども（英才）」、「特に高い創造性をもつ子ども（峻才）」、「著しい能力の凸凹をもつ子ども（峻才）」、「高い芸術的能力をもつ子ども（芸才）」と分類している。そして、天才児を含めたすべての子どもたちのニーズをきちんと把握し、それにこたえ、子どもたちの能力を伸ばす働きの重要性が、今後の日本の特別支援教育に必要なものであると強調し

ている。

第2章のタイトルは「アスペA型」である。この章では「2E」について、より具体的な紹介がなされている。「2E」の者は、しばしば広汎性発達障害、それも高機能群の診断基準を満たす場合が多い。神経心理学の視点からいえば、特に成人に至った知的に高い自閉症圏の発達障害では、前頭葉の機能である実行機能(予定を立てたり、類推をしたり、先読みをしたりする能力)の障害と、連合野の働き(1つの分業の領域と別の分業の領域を一緒に動かす働き)の苦手さが際立っており、2Eの形をとるといえる。

著者は、特にアスペルガー症候群に関して、歴史上の偉人や人類の文化発展に寄与した偉大な科学者にそういった人が多くいることを例にあげ、臨床例の中からも具体的な事例を紹介している。

著者は、「幼児期、学童期の状態から、アスペルガー症候群であると思われるが、適応不全は認められておらず、適応が比較的良好なタイプ」であるという、初診時39歳の男性「Bさん」を例にあげ、そのグループを「アスペA型(Adjustable type、適応型の高機能広汎性発達障害)」と分類した。このグループは、発達凸凹ではあるが、発達障害ではなく、未診断の成人の中では少なくはない。

そして、人の話をまったく聞けず、自分のこだわりが強く、それに固執し実現させてしまうグループのことを、「アスペB型(Bothersome type、時に問題行動を起こす非社会型)」と分類した。

そして、悪意はなく、それなりに頑張っているが、気づかずに非常識なことを繰り返してしまうグループを、「アスペO型(active but odd、奇異が目立つ型)」とした。

最後に、不幸にして周囲からの迫害体験を重ねて受け、そのために被害的な状況が固定してしまったグループを、「アスペAB型(abused、迫害された型)」とし、触法に至ってしまう人の中に典型的に認められるタイプであると分類した。著者はこれらの分類をあ

げ、こういった特性に合った教育の実施の大切さを強調している。

第3章は「視覚優位性の世界」について書かれている。この章では最初に、幼児期から視覚に強い認知特徴を持つ「視覚映像優位型」と、聴覚に強い認知特徴を持つ「聴覚言語優位型」の子どもが多くいることが述べられている。

前者は、絵を見て理解するほうが、文字を読むよりはたやすく、後者は、説明文を読んだり、言葉を使った説明を通したりするほうが理解しやすい。そういった認知特性が異なるタイプ(優位性)によるために、教育現場では子どもたちの理解や指導に混乱が生じていると考えられている。こういった認知特性を知ることは、教育の場や社会生活の場で、導きの手だてやかかわりの手だてになるとしている。

著者は、ダーウィンにも視覚優位性の特性があったことを、いくつかの事例とともに紹介し、「視覚映像優位型」や「聴覚言語優位型」の人が、単にその領域が得意であるというレベルを超えて、認知の優位性がそれ以外の認知能力に比べて極端に突出していたり、それ以外の認知能力がハンディキャップと言わざるをえない谷間を作っていたりすると、教育において特別支援を必要とする状況になると強調している。

ここでは、ダーウィンのように三次元からの情報の入力が得意で、映像を使って思考する人、視覚認知が得意であっても、写真などの二次元においてのみ認識できる人、二次元の線(文字など)の理解に長けている「線優位性」の人、色や空間認知・明度の認知に優れている「色優位性」の人などが紹介されている。

第4章は「視覚優位型の子どもたちへの特別支援教育」について書かれている。ここでは、「2E」の峻才児である「C君」の事例が紹介されている。

「C君」は、幼少時から、発達の凸凹が顕著であり、映像や空間に対する記憶力は優れ

ている一方で、読み書きの面で困難がある学習障害のために、中学校の勉強すら困難を極めていた。「C君」は高校からイギリスに留学を決め、学習障害への対応を行っている高校を選択し、その後、イギリスにて読字困難に対する五感を用いた読字指導をうけたり、教科学習でも興味が持てる内容に変更してもらうなどの配慮がなされたりして、才能を発揮することができた。「C君」の例は、特性に対する配慮を得て、最終的には著名な建築学校に入学することができたという成功例である。

著者は、言語を聴覚で理解しその過程を通して知識を積み上げていく方法が、現在の日本の教育現場での主要科目で主流であり、それが、「C君」のような「視覚優位型」の子どもにとっては不利なものとなっていると述べており、今後の日本の教育は、「C君」が経験したイギリスでの教育のように、1人ひとりの認知特徴を踏まえた専門性が必要であると強調している。

第5章のタイトルは「聴覚優位型の見え方の障害を支援する」である。著者は、自閉症で、「聴覚優位型」の発達障害者であるドナ・ウィリアム氏の著書、『自閉症だったわたしへ』からいくつかの事例を紹介し、「聴覚優位型」の見え方について述べている。

「聴覚優位型」の人にとっては、目は目、鼻は鼻とばらばらに認知されて、顔として認識されていなかったり、奥行きを認知するための「パースライン（パースペクティブ・ライン）」の認知が苦手であるために、三次元空間の中の互いの距離や奥行きを理解できなかったりする。（一方で、このタイプの人は、三次元の実物よりも、写真や絵のように二次元像に写された立体は理解できる。）

著者は続いて、「パースライン」の認知をめぐる脳の動きに関連して、「V4-岡・宮尾仮説」および「ミラーニューロンシステム」からの説明を行っている。上述のドナのような見え方の問題は、大脳皮質にある視覚領野の1つである、「第4次視覚野（V4）」を中心とする部分と扁桃体との協働によって問題

が生じているという「V4-岡・宮尾仮説」である。

また、自閉症や広汎性発達障害の有力な生物学的な要因の1つとして、ミラーニューロンと扁桃体をつなぐ領域が注目されているとし、脳の機能レベルまでたどって、視覚映像の認知について理解を深めようと試みている。筆者は、「視覚優位型」と同様に、「聴覚優位型」の人たちに対する特別支援教育の専門性を高めることの重要性についても強調している。

第6章は「認知知覚からみた文字の認知をめぐる」である。ここでは、前の2つの章に続き、「視覚映像思考型」の事例として、色に優位性を持つ「D君」の事例が、また、「聴覚言語思考型」の事例として、線に優位性を持つ「E君」の事例が紹介され、色と線の優位性について、それぞれ具体的に論じられている。

この章にて紹介されている2人の子どもの事例を通して、読者の認知知覚の凸凹に対する理解も更に深まることになる。同時に、このような著しい才能の凸凹を持つ子どもの、集団教育の場における適応が難しいことが実感させられるのである。

第7章は「アメリカにおけるギフテッド教育」について書かれている。はじめに、アメリカのギフテッド教育における2つの基本である、「早期履修（学年で規定されている内容よりも先取りして学習するシステム）」と「強化履修（特別の学習内容を枠にとらわれず広く深く学習するシステム）」という2つの基本的の方法が紹介されている。

前者の「早期履修」には、飛び級、履修短縮、早期入学、科目別早期履修、上記履修クラス（高校で大学の授業内容を学び大学の単位認定がなされる）、二重在籍制度がある。

後者の「強化学習」には、一般教育における工夫（子どもが興味や能力に応じて教科学習の深化や強化が自由にできるようになっているなどの工夫）、休日プログラム、さまざまなコンテスト、「全校強化履修モデル（SE

M)」がある。アメリカでは、すでに、これら2つの基本システムについては、全生徒への適用が何年も試みられているという。

次に紹介されているのは、「アメリカにおけるギフテッドへの教育史」である。長くなるので詳細は割愛するが、ここでは、1869年にゴールドンが『天才と遺伝 (Hereditary Genius)』を発表した前後の1860年代～1870年代に、能力別編成学級の措置が導入されたことからはじまって、1990年にギフテッド教育の研究機関である「国立英才・才能教育研究所」が設立され、「すべての子どもがその潜在的可能性を開花することを目指す」という方向性が確率されるまでの経緯が記されている。

筆者は続いて、アメリカのギフテッド教育にて実施されている、子どもがそれぞれに異なる能力を有しているということに着目した「MI理論」、「普通教育と連携してすべての子どもたちの強化を行い、高学力でも学習困難でも子どもの個人差を尊重して学習を個別化させ、真の平等を旨とする」という理念に基づいた「全校強化履修モデル (SEM)」を紹介している。

第8章は「2Eの子どもへの教育」について書かれている。ここでは、数字の処理には長けているが、現代文の読解や英作文が苦手という、脳力凸凹が著しい「峻才児」の「F君」の事例が挙げられている。そして「F君」のような「2E」の子どもには、3つのタイプがあるとして、アメリカの2E教育の先駆者であるバウムによる分類を紹介している。

1つ目のグループは、高い言語能力を持つ子どもたちとして認識されているが、特定の領域（読み書きなど）が苦手という特徴を持っており、苦手な部分に対する配慮が得られていないグループである。

2つ目のグループは、能力の峰である才能が障害を隠し、障害が才能を覆い隠している、ギフテッドとも学習障害とも認定されていないタイプである。

3つ目のグループは、支援する側が能力の谷ばかりに目を向けてしまい、得意な領域に

気づかれないという最も多いタイプである。

「2E」の子どもは、特に伸ばすべき能力の峰に気づかれないまま、適切な対応がなされないことによって、二次的な問題が生じる可能性も高いという問題を著者は指摘している。そして、「2E」の子どもたちの認定方法、「2E」の子どもの才能の峰に気づくことの大切さ、才能の峰の伸ばすための方法、「2E」の子どもへのガイドラインがまとめられている。

第9章のタイトルは、「創造性とは」である。著者は「高い知能と創造性は同じものであるか否か」、「高い知能もしくは創造性と、心身の健康は併存するのか」、「天才的能力が年を取っても維持できるのか」、「創造的な能力は何らかの精神の病と結びつくのか」などのいくつかの疑問を提起し、先行研究などからの検証を試みている。

「高い知能と創造性は同じものであるか否か」については、単に知能が高いだけでは創造性と直結するわけではなく、両者は異なるものであると結論づけられている。また、脳の連合野の働きという観点から、「天才的能力が年を取っても維持できる」としている。「創造的な能力は何らかの精神の病と結びつくのか」については、創造的な人々は、魅力的で健康的、自制心に富んだ、規則正しい生活を行っている人だと結論づけられている。

また、彼らに最も多く認められた精神医学的な問題は、軽度のうつ病または躁うつ病（軽度で一過性の非定型的な気分障害）であったという。著者は、高機能広汎性発達障害に最も多い精神科的併存症が気分障害であるという点をあげて、創造的な人々についての研究において、発達障害を視点に入れて調査をする必要性を強調している。

第10章は「未来への提言」である。著者は、「ギフテッドへの特別支援」という視点から、日本の特別支援教育への提言をまとめている。著者は、現行の特別支援教育の問題点として、「特別支援教育の対象をめぐる学校側の混乱」、「保護者との間の齟齬」、「特別支援教育を担

う側の専門性の不足」、「高等教育における発達障害への処遇」をあげている。そして、ギフテッドへの特別支援教育を広げることによって、上述の4つの問題に解決の道筋が得られるとしている。

次に、著者が幼児期から相談を受けてきたという「E君」(ギフテッドの部分が出た英才ではなく、一般的な、能力の凸凹を持つ青年)の事例および手記が紹介されている。「E君」が不登校となり、独自に学力の補いと、凸凹の補いをする結果になってしまったことから、このような子どもが教育の中でつぶされるのではなく、生かされることが可能な特別支援教育システムの必要性を提起している。

最後に、著者は、本書において主張したいとする3点を述べている。第1点は、発達の凸凹をもつ子どもたちの認知特性の問題に関して、これまでの基礎的な研究や教育的対応はまだ粗く、より詳細に見極めていかなければならないことである。

第2点は、これらの凸凹に対して、最新の脳科学の成果を踏まえた対応法のヒントがいくつもすでに見出されており、その成果は、知的障害を併せ持つ発達障害児をはじめ、全てのハンディキャップのある子どもたちへの教育において応用が可能であるということである。

第3点は、認知の峰と谷に対応することで、より多くの子どもが適応障害をきたすことなく、社会に貢献できる独創的な人材に育つ可能性があるということである。そして、アメリカの「全校強化履修モデル (SEM)」に言及し、「ギフテッドへの特別支援教育は、すべての子どものニーズに対応した教育を実現するという特別支援教育に踏み出す最初の第一歩となる」と締めくくっている。

本書では、メインとなる10の章のほかにも、「自閉症スペクトラムと広汎性発達障害」、「聴覚優位のアンドリアセン」、「映像思考の子どもたちの語彙力を増やすには」、「奥行き感をつかめない子どもたちの日常」、「天才たちを支援した人々」、「効果的な学習方法って何だ

ろう?」、「2Eの子どもたちへの授業」、「より広範な自閉症表現型 (Broader Autism Phenotype)」、「特別支援教育の免許状をめぐる」という、著者の考えや価値観が反映された興味深いコラムも掲載されている。

3. 本書の意義

本書の大きな意義は、日本における「2Eの」子どもを対象としたギフテッド教育の必要性を提起していることである。アメリカのギフテッド教育の歴史やあり方を参考にしつつ、また著者らの豊富な臨床経験、自身の研究、実際の事例などをもとにして、その重要性を検証していることは、研究者ならではの貴重な視点であるといえる。また、ギフテッド教育が浸透していない日本において、この提起がなされたことによって、ギフテッド教育の必要性を考える契機が与えられたことは、大変有益なことであると評価することができる。

「できる者を更に優遇するのか」、「あまりに早くに学ばせると心の発達に問題が起こる」などといった周囲からの批判に対しては、著者は文中において、「天才児の才能の峰の部分についての一斉授業による学習は、明らかに本人のニーズとあっていない学習方法である」、「一斉授業による学習が適している科目に関しては、従来の教育を受け、得意な科目のみ早期履修することがのぞましい」と述べている。

また、「わが国の特別支援教育は、特殊教育からの発展型というしがらみによって、もっぱら能力の谷にのみ焦点が当てられており、能力の峰に関してはまったく考慮されていない」、「教育に対する日米の基本的な立場の違いが色濃く反映しているのではないか」とも述べている。

これまでの日本の教育は、「メイン・ストリーム (一斉授業)」における教育が重視されてきており、この背景には、平等主義、みんな同じという考え方が強く反映されてきた。教育社会学者の恒吉僚子は、著書の『人間形成の日米比較—かくれたカリキュラム』にお

いて、「生まれつきの能力差は存在しないか、たとえ存在しても努力や環境などの後天的なものに比べれば問題にならないという考えが、日本人の間では一時代前から強いとされてきた。これは、能力平等観などと呼ばれ、日本人の特徴だと言われている。私が観察した日本の学校でも、少なくとも建前としては、教師は一貫としてこの立場をとっていた」と述べている。この種の思考が根強く、能力の谷の部分への支援が重要視されている現在の日本の教育に、ギフテッド教育の考え方が浸透するには、更に一定の時間が必要であるだろう。

著者はまた、「アメリカと日本では教育に関する事情が異なるので、そのままアメリカの教育方法を日本の教育に取り入れるわけにはいかない」としながらも、「アメリカの教育、ギフテッド教育の変遷を知ること、日本におけるギフテッドへの教育にもなんらかのヒントになるのではないかと提起している。

確かに、ギフテッド教育の推進には、アメリカのギフテッド教育を参考にする価値は大いにあるといえる。しかしながら、現在、香港におけるギフテッド教育の歴史や現状についての調査をしている筆者は、香港がアメリカのギフテッドのギフテッド教育を参考にして発展してきた結果、現在、アメリカのギフテッド教育が抱える困難と同様の困難を抱えるようになってきていることを垣間見ており、アメリカのギフテッド教育を参考にするには、注意が必要だと実感している。

ここで、少し香港におけるギフテッド教育の概要を紹介したい。香港では、1990年代に入ってから、政府によって正式にギフテッド教育の実施が模索されるようになった。1990年、香港教育統籌委員会は『第四号報告書』（アメリカ連邦教育局によるギフテッドの多元的な定義が引用されている）を發布し、ギフテッドの定義および教育サービスの需要について検討し、香港教育局（旧香港教育署）によって、小中学校におけるギフテッド教育が開始された。（1990年代の香港のギフテッ

ド教育は、アメリカと同様、紆余曲折がみられたが、その詳細については割愛する。）

現在の香港のギフテッドの基準について言えば、知能指数だけがギフテッドの基準を満たす唯一のものではなくなり、ある範疇（例えば、音楽、絵画、話術、運動、数学、記憶力、創意、分析、リーダーシップ、機械技術など）において、突出した能力を持っている場合、知能指数が130に達していなくても、ギフテッド児としてみなされるようになっている。この点もアメリカに類似している。

そして、現在、香港では、2つの大きなギフテッド教育のモデルが推進されている。1つ目は、「全員参加型」の授業であり、教師が、リーダーシップ能力、創意、思考といったギフテッドの要素を、正規教育の中に取り入れることを推進すると同時に、子ども特質や能力を見出し、グループごとに特化したトレーニングを提供している。

2つ目は、「選抜方式」であり、学校では、選抜されたギフテッド児を対象に、授業外において系統だったトレーニングをおこなっている。これらもアメリカの「全校強化履修モデル（SEM）」や「科目別履修モデル」に類似するものである。その他、アメリカと同様に、飛び級、履修短縮、早期入学も実施されている。

また、香港教育署は、1995年に「馮漢柱ギフテッド教育センター」を設立し、それをギフテッド教育の中心的な機構と位置づけ、2008年に香港ギフテッド教育学院が成立してからは、該学院が計画の訓練センターとして委任され、10～18歳のギフテッド児に対して、関連する教育サービス、育成課程、選抜活動などを実施している。それには、ギフテッド児の選抜、育成および支援のほか、ギフテッド児の保護者およびギフテッド児のクラス担任を対象とした講座の開講も含まれている。こういった機関の設立もアメリカを参考にしたものである。

香港では、1990年代以降、アメリカのギフテッド教育を参考にして、上述のようにギフテッド教育を発展させてきたが、現在、3つの深刻な問題が生じている。1つ目は、推薦

制度の問題である。現在の制度では、学校によって、まずギフテッド候補者が選抜されるが、学校側にこの方面における専門的な知識が欠如している場合、被推薦者の多くは成績上位者に偏り、ギフテッド児であるとは限らないことである。

2つ目は、ギフテッド教育を実施する者の育成の問題である。香港では、ギフテッド児を育成する専門的な学校や人材が欠如しているために、ギフテッド児の潜在的な能力を十分に発揮することができる人材が十分ではないのである。加えて、それを補うための、政府、大学および教育学院のギフテッド教育に対する系統だった協働も欠如している。

3つ目は、支援の問題である。香港政府は、峰の部分に対する教育を重視しているが、谷の部分に対する支援不足が、近年、研究者や教育現場から問題視されるようになってきている。

そして、2009年には、香港ギフテッド教育学院は「二重特殊ギフテッド児（本書では2Eと呼ばれている子どもたち）を探す計画」を打ち出した。ギフテッド児として選抜された子どもたちの中に、かなりの割合でAD/HD、自閉症、アスペルガー症候群、LDなどの発達や学習の障害をもつ子どもがいることがわかってきたのである。

彼らは、常にできる部分について着目されてきたために、障害の部分がケアされることがなかった。香港のギフテッド教育でも、ようやく谷の部分のケアの必要性が認識されるようになったのである。だが、「二重特殊ギフテッド児」に対する研究および支援は、展開されたばかりであり、支援が得られているのはほんのひと握りの子どもだけであるといわれている。この方面での対応は、現在の香港におけるギフテッド教育の重要な課題の1つとなっている。

在米の邦人研究者であるポーター倫子氏のレポートによると、近年、アメリカでも、「二重に例外的な (Twice Exceptional)」と呼ばれる、障害を抱えたギフテッド児が注目されるようになってきているという。AD/HD、自閉症、アスペルガー症候群、LDなどの発

達や学習の障害をもつ子どもたちの中で、ギフテッドとみなされた子どもたちが、診断漏れで特別支援教育を受けられないことが問題視されているというのである。この報告を読んで、筆者は、アメリカでも、現在の香港のギフテッド教育が抱える困難と同じ問題に直面していることに驚いた。

更に、ポーター氏は、またその能力にばらつきがある場合（例えば、文字学習は苦手だが、飛びぬけた絵の才能がある場合など）、学校としての対応が困難となっていることも、問題となっているとしている。

ポーター氏のレポートでは、アメリカで実施された先行研究も紹介されており、18~25%のギフテッドの生徒が高校をドロップアウトしていることが報告されている。ドロップアウトの主な理由は、「落ちこぼれた」、「学校が好きじゃない」、「仕事を見つけた」、「妊娠した」などであり、その生徒たちのほとんどが「学校に戻るつもりはない」と回答しているという。ここでは、貧困家庭に生まれたり、ヒスパニックやネイティブアメリカン等のマイノリティであったり、親の教育歴が低かったりするほど、より多くこういった傾向が見られることが追記されている。

筆者は、この状況を知って、ギフテッド教育は、子どもの能力（凸凹ともに）のみに着目するだけではなく、家庭環境や生い立ちなどもふくめた子どもの背景をも考慮に入れなければならないということを強く実感した。

本書では、特に「2E」の子どもの峰と谷の双方に照準が当てられていることを、筆者はとりわけ高く評価している。なぜならば、ギフテッド教育が進んでいると言われるアメリカや、それを参考にしてギフテッド教育を実施している香港では、「2E」の峰の部分に重きを置き過ぎるあまりに、結果的には、谷の部分や子どもの背景などが疎かになってしまっているからである。本書は、最初の段階から、「2E」の峰と谷の双方に対して配慮をするというバランスの取れた提起をしている。

本書では、アメリカのギフテッド教育のモ

デル（特にSEM）が、参考にすべきモデルとして幾度も紹介されているが、こういった長所の部分のみならず、アメリカのギフテッド教育が抱える深刻な問題についても、反面教師として参考にするべきであるといえる。過去20年にわたって、一貫してアメリカのモデルを参考にしてきた香港のギフテッド教育が、現在、アメリカと同じような問題を抱えているということについても留意する必要がある。

ここでは事例をあげることを割愛したが、アジアでギフテッド教育が非常に進んでいるといわれている中国においても、アメリカや香港とは異なるギフテッド教育の弊害が生じている。アメリカのみならず、現在、ギフテッド教育を実施している国や地域の実施状況について（負の面や問題点も含めて）、より範囲を広げて理解し比較することも一考されたい。

筆者は、日本におけるギフテッド教育が必要か否かを、ここで論じているのではない。本書を通して、日本における「2E」の子どもたちへのギフテッド教育の必要性を考える契機が与えられたことによって、多くの人たちが、社会における発達障害に対する理解や支援の重要性について考えるようになることを、願ってやまないのである。

参考文献：

合田美穂著「香港におけるギフテッド教育の歴史・政策・課題」、『甲南女子大学研究紀要』第46号人間科学編、2010年3月。

恒吉僚子著『人間形成の日米比較一かくれたカリキュラム』、東京：中央公論社、1992年。

ポーター倫子著「アメリカのギフテッド教育事情」、<http://www.blog.crn.or.jp/report/02/130.html>

（杉山登志郎・岡南・小倉正義著、『ギフテッド 天才の育て方』、学研教育出版、2009年12月刊、A5版、189ページ、本体1700円）